



保育所間の移行が幼児の仲間関係に及ぼす影響

| | |
|-----|---|
| 著者 | 本郷 一夫, 鈴木 智子, 松村 友宇子, 稲垣 宏樹, 小泉 嘉子, 猪原 裕子 |
| 雑誌名 | 東北教育心理学研究 |
| 巻 | 8 |
| ページ | 41-53 |
| 発行年 | 2001-03 |
| URL | http://hdl.handle.net/10097/00121888 |

保育所間の移行が幼児の仲間関係に及ぼす影響

本郷一夫*、鈴木智子*、松村友宇子**、
稲垣宏樹***、小泉嘉子*、猪原裕子****

*東北大学教育学研究科、**ことりさわ学園、

東京都立老人総合研究所、*メンタルクリニック・ダダ

I. 問題と目的

1960年代、70年代に作られた保育所が、現在老朽化に伴い建て替えの時期にきている。この場合、日常の保育を行いながら部分的に改修工事を進めるという方法も取られるが、庭が狭かったり老朽化の程度が激しかったりする場合、必ずしもこのような方法を取ることができない。そこで、子どもを一時的に他の保育所に移行させることになる。本研究は、このような事情で集団で別の保育所に移行した幼児に焦点を当て、移行前の保育所における仲間関係と移行後の保育所における仲間関係の特徴を比較することにより、保育所間の移行が幼児の仲間関係にどのような影響を及ぼすのかを明らかにする目的で始められた。このような保育所間の移行が仲間関係の成立に及ぼす影響に焦点を当てることは、仲間関係の形成要因を明らかにするだけでなく、新しい環境への適応、既成の集団へ参入する場合の仲間関係の形成などに関する今後の保育実践に基礎的資料を提供することにつながると期待される。

保育所間の移行に限らず、幼児が新しい環境に移行し、その中で新たに仲間関係を形成していくことはその後の集団への適応にとって重要だと考えられる。たとえば、3、4歳児の幼稚園・保育所への新入園の際の不適応行動を調べた田村・森永・前(1999)の研究では、「友だちと遊べない」という項目は、全体としては幼稚園・保育所に「喜んでこない」に続いて2番目であったが、「着席できない」など子どもの具体的行動や状態を示す内容としては最も多く保育者があげていた項目であった。また、新入幼稚園児の友人関係を扱った中澤(1992)の研究からは、入園初期に他児とネガティブな相互作用を多く示す幼児は後に仲間からの低い評価を受けることが示されている。これらの研究から、とりわけ出会って間もない頃の仲間関係が集団への適応やその後の仲間関係の形成にとって重要であることが示唆される。しかし、初期の仲間関係がうまくいっていれば、その後も安定的な仲間関係が持続するとは必ずしも言えない。集団の形成過程に応じて、幼児は仲間関係のあり方を変化させていくことも必要になってくると考えられる。たとえば、年

少男児が新入園後どのように仲間関係を形成していくかを追跡した佐藤・請川・結城・宮下・若井(1998)の研究では、「バラバラで自分の遊びを展開している」段階から「遊びの種類によって相手を変える」段階へと仲間関係が変化していく中でより柔軟な関係を幼児が作りあげていく様子が示されている。

以上は、新入園の幼児についての問題であるが、新しい環境に移行し、そこで仲間関係を新たに作り上げていくという点では、本研究で対象とする幼児がかかえている問題と共通する。しかし、新入園の場合もそうであるが、2年保育の4歳児集団にみられるようにすべてが新入園の幼児である場合と3年保育の4歳児にみられるように既に出来上がっている集団の中に新たな幼児が加わる場合とでは、仲間関係の形成過程が異なると考えられる。本研究で対象とする幼児の場合、新しい保育所へ移行するという点で、後者の場合と同様に、既成の仲間集団へ新たに参加するという形になる(ちなみに、移行先の保育所では新年度に移行する子ども以外の新しい子どもは受け入れていない)。その点で、移行児にとっては新たな集団に仲間入りすると考えることができる。

従来、幼児の仲間入り行動は、それ自体が子ども同士の相互作用の始まりであるだけでなく、仲間入りが認められ集団の一員となり、遊びとしての相互作用が新たに開始されるという点で、幼児の社会的相互作用の重要な側面だと認識されてきた(本郷、1994)。この仲間入り行動は、日常生活を共にする仲間集団の遊びの中に仲間入りしようとする、いわば顔見知り集団への仲間入りの場合(倉持・無藤、1992; 倉持、1994; 田上、1989)と既存集団に新たに参入する新参者の仲間入りに関する研究(Feldbaum, Christenson, & O'Neal, 1980)に分けられる。アッシャー・クローイ(1996)は、このような仲間入りに関する過去の研究を概観する中で、いくつかの研究に共通の特徴を指摘している。それは、新入児は最初あまり動かず、手遊びをしたり消極的観察をする時期を経て、次第に集団成員に接近し相互作用を持つようになるという同化のプロセスである。その際、最初に見られるいわゆる傍観者の行動は、その集団の規範や準拠枠を知り、その後の適切な仲間入り行動をとる上で重要だ

と認識されている。この点については、幼稚園への転入児6名を対象とした大野（1997、1998）の研究からも同様の結果が確認されている。大野は、転入児は当初一人遊びが多いが、時間の経過と共に徐々に減少し、自己主張や拒否・無視などの否定的行動をとる傾向を報告している。そして、これらの行動変化は園に慣れてきたことを示す一つの証拠だと解釈されている。

本研究で対象とする子どもたちにおいてもこのような変化が予想されるかもしれない。しかし、上述の研究の対象となった子どもたちと本研究の対象となる子どもたちとの大きな違いは、本研究の対象児は集団で移行するという点である。子ども一人一人に焦点を当てれば、既に関係が形成されている集団に参入するという点になるが、集団での移行という点からすれば、既存集団内における仲間関係の変化や集団と集団との対立と融合の過程も考慮する必要があるであろう。このうち既存集団内における変化については、進級児の仲間関係を扱った高濱・無藤（1997）の研究が参考になる。彼女らは、3歳児クラスの男児3名を対象に、新入園児の参入にともなう進級児の相互作用の変化について検討した。その結果、移行期には既存の仲間関係が不安定となるため、関係操作に動機づけられた行動が活性化したり、アンカーパーソンに依存する行動が出現することを示唆している。これを本研究に当てはめれば、単に個々の子どもの新しい集団への仲間入りの過程だけでなく、同時に移行児集団内の仲間関係の変化やアンカーパーソンへの依存行動が出現することも考えられる。

したがって、新参者の仲間入りに関する研究や進級児の相互作用に関する研究から直接仮説を導くことはできないが、従来の研究結果を参考にして、本研究では以下の予想を確認する形で研究をすすめることにする。

予想1 3歳児において移行の影響が最も強く現れるであろう。

3歳児は、4、5歳児と比べて、社会的スキルや社会的コンピテンス（Erwin, 1993）の発達が十分ではないと考えられる。たとえば、新しい仲間関係を形成すること、既存の仲間関係を柔軟に変化させることや新しい環境に適応することに困難があると考えられる。また、ここでの3歳児はいわゆる「未満児」クラスから「以上児」クラスへの移行も経験することになる。したがって、移行直後は、移行前に比べて子ども間の相互作用が一時的に減少すると予想される。

予想2 「仲良し」が他の保育所に移行してしまった子どもに影響が強く現れるであろう。

移行の影響は、単に年齢や社会的スキルの発達によ

てのみ決まるわけではない。とりわけ、引っ越しなどに伴い1人の子どものみが保育所を替わる場合とは違い、本研究の対象となる幼児のように集団で移行した場合、移行前の仲間関係のあり方によって移行後の仲間関係が違ってくると考えられる。

たとえば、入学、入園に際して、以前からの友だちが存在することは、新しい環境を探索するための「安全基地」として作用するとともに、新しい環境の新奇性を減少させる役割を持つことが示唆されている（Schwartz, 1972；Ladd & Price, 1987）。したがって、移行前の保育所において仲の良かった子どもと一緒に移行した場合、仲良しの子どもが「安全基地」や「社会的アンカー・ポイント」（山本・ワップナー、1992）として機能するため、日常の遊び内容や対人関係がそれほど大きく変化せず、移行の影響はそれほど大きくないと考えられる。一方、仲の良かった子どもが他の保育所に移行した場合、環境の変化が大きく、新たな対人関係を形成する必要もあるため、子ども間の直接的な相互作用が減少したり、対人関係がより消極的になるのではないかと考えられる。

本研究では、上述の予想を確認するために、大きく以下の3つの観点から分析を行うことにした。第1に、子どもの活動の状態、子ども間の遊びにおける役割や子ども以外の人との相互作用の状態を捉えるために、単位時間内における子どもの状態を捉えるためのフレーム数の分析を行う。その際、子ども以外の人との相互作用の分析では、「保育者」だけではなく、「観察者」をその対象に加えた。多くの研究では、観察者はいわば「黒子」と考えられ、たとえ観察時に観察者との相互作用があったとしてもその頻度は明示されず、相互作用そのものがなかったかのように記述される。しかし、保育環境の中においては、観察者も相互作用の対象となりうる。また、観察者との相互作用に多くの時間を費やす場合、他児や保育者との相互作用が少なくなるということも考えられる。そこで、本研究では、観察者は積極的に子どもに働きかけないが子どもからの働きかけには最少限応じるような態度で望み、観察者との相互作用を記録した。第2に、フレーム数で捉えた子どもの状況の中で具体的にどのような子ども間のかかわりがなされていたかを明らかにするために、相互作用の内容と頻度について分析を行う。その際、誰との相互作用かということが問題となる。したがって、単に働きかけ内容の頻度を求めるだけではなく、相互作用の相手の子どもを特定することにした。第3に、予測2を確認するために、「仲良し」を特定し、その仲良しの子どもと一緒に移行したのか、仲良しが他の保育所に移行してしまったのか、あるいはそも

そも特定の仲良しが存在しなかったのかといった仲良しの子どもの移行状況との関連で仲間関係を分析することにした。

II. 方法

1. 焦点児：A保育所に在籍する幼児のうちB保育所に移行した幼児23名を焦点児とした。内訳は5歳児11名（男児3名、女児8名、観察開始時の平均年齢5；6）、4歳児7名（男児2名、女児5名、平均年齢4；5）、3歳児5名（女児5名、平均年齢3；1）であった（なお、年齢表記は移行後のクラス編成に基づいている）。

建て替え予定のA保育所からは、事前の親の希望に応じて、B保育所も含め複数の保育所に子どもたちが移行した。このうち、B保育所はA保育所から最も距離的に近いこともあり、最も多くの子どもが移行していた。ここで焦点児として抽出された23名は、A保育所からB保育所に移行した3歳以上児全員に当たる。なお、環境移行をなるべくスムーズに行うために、事前に、A保育所の子どもがB保育所を訪問するという形で2回の交流保育が行われた。交流保育は各々半日であり、移行先の保育所を見学する、移行先の子どもと一緒に歌を歌うなどの内容からなっていた。また、主任1名、保育者1名、栄養士1名が同時にB保育所に移行していた（B保育所は主任2名の構成となっていた）。移行先のB保育所は、入所定員と関連して建物、庭ともA保育所に比べ若干大きな作りになっていた。しかし、A保育所と同じ公立保育所であり、共に障害幼児も受け入れるなど、クラス構成（年齢別のクラス構成）や保育内容については大きな違いはなく、移行した子どもに対する特別のプログラムは設定されていなかった。さらに、移行先のB保育所では、移行児を受け入れるため、その年度には新入所児を受け入れていなかった。またA保育所と同様に、「自由遊び」時間には、3歳以上児が保育室や園庭で年齢別のクラスを越えて自由に遊び空間を選択できる体制になっていた。

2. 観察期間：第1期（移行直前）：1997年3月、第2期（移行直後）：4月、第3期（移行5か月後）：9月に各々2週間程度の観察を行った。なお、移行5か月後の9月に観察を行ったのは、子ども同士の仲間関係が比較的安定してくると同時に、夏休みの特別な保育体制が解消され職員配置が通常の保育体制に戻ること、夏祭の練習・プールなどの活動がなくなり、第1期、第2期と同じような活動が展開されるようになると考えられたからである。

3. 観察手続き：観察は、午後のおやつ終了後の「自由遊び」場面において、原則として1人の焦点児に2人の観察者（1人がVTR、1人が筆記）がつくという方法で、焦点児と他児とのかかわりを1日1人当たり20分～30分、2～3日観察した。そのうち、各時期1人当たり40分を観察データとして分析した（第1～3期の各時期920分、合計2,760分）。なお、子ども当たり40分のデータを構成するに当たっては、その子どもについて10分以上連続して記録がなされているデータを用い、子どもがトイレに行くなどして観察が途中で中断され連続した観察が10分未満となってしまったデータは除外した。

4. 分析測度：単位時間内における子どもの状態を表すフレーム数の分析と子ども間の相互作用・対象の分析の大きく2つの分析を行った。なお、これらの分析を行うに当たっては、過去の研究を参考に予備的カテゴリーを作成し、それを用いた分析結果に対する保育者の評価を参考に、最終的カテゴリーを作成した。

(1) フレーム数による分析：子ども間の直接的な相互作用だけではなく、子どもの遊びの状態、保育者・観察者とのかかわりの状態を知るために30秒を1フレームとし、TABLE 1に示す4つの分析測度についてフレーム数を求めた。なお、A. <対人形式>及びB. <活動形式>については、本郷（1997）を参考に、そのフレームにおいて最も多く時間を費やしたサブカテゴリーを記録した。C. <働きかけ>、D. <働きかけられ>については、各サブカテゴリーの有無を記録した（このうち、「保育者」は移行前後で異なっている）。したがって、A～Dの各サブカテゴリーについては最大が1時期1人当たり80フレームとなる。

(2) 子ども間の相互作用内容・対象の分析：本郷・布施・鈴木（1987）、本郷・佐々木・佐々木・橋川・高梨（1994）を参考に、相互作用の対象及びその相互作用内容の頻度を記録した。

A. 相互作用対象：①焦点児（環境移行を経験した子ども）、②非焦点児（焦点児以外の子ども。移行前においては焦点児を除くA保育所の子ども、移行後においては焦点児を除くB保育所の子ども）、③不特定（同時に4人以上の子どもとかわった場合、あるいは子どもが不明の場合も含む）の3カテゴリー。

B. 対象児名：働きかけた子どもあるいは働きかけられた子どもの名前。

TABLE 1 フレーム数の分析カテゴリー

A. <対人形式>

1. 一 人：1人で遊んでいる、あるいは活動している。
2. 役 割：2人以上の集団の中で一定の役割を担って遊んでいる。
3. 非役割：2人以上の集団の中で遊んでいるが、特定の役割を担っていない。

B. <活動形式>

1. 遊び・活動：何らかの遊び・活動に従事している。
2. 見る：他児の行動を眺めている。
3. プラブラ：一定の遊び・活動に従事せず、他児の行動も眺めていない。

C. <働きかけ>

1. 保育者：保育者に対する働きかけ。
2. 観察者：観察者に対する働きかけ。

D. <働きかけられ>

1. 保育者：保育者からの働きかけ。
2. 観察者：観察者からの働きかけ。

C. 働きかけ内容：「禁止・拒否等」など全17カテゴリー。各カテゴリーの内容はTABLE 2に示す通りである。なお、1フレーム内において同一の他児に対して（同一の他児から）、同一の働きかけ内容を複数回行った（行われた）場合は、頻度1として計算した。例えば、同一フレーム内において、同一の他児に対して3回連続でたたいた場合は「攻撃」1、同一の他児から複数回呼

びかけられた場合も他児からの「呼びかけ」1と記録された。これは、連続して行動がなされた場合どこでその行動を区切るかといった、主として行動の区切りの曖昧さの問題を解決するためである。また、「～ちゃん、～して」という働きかけがあった場合には、「呼びかけ」と「指示・命令」の2つのカテゴリーに頻度1ずつが記録された。

TABLE 2 働きかけ内容のカテゴリー

1. 禁止・拒否等：相手の行動に対する禁止、抗議、相手の要求に対する拒否。
2. 指示・命令等：相手に対する指示、命令、要求など。
3. 遊びの提案：新たな遊びの提案、進行中の遊びの進め方についての主張。
4. 呼びかけ：相手の子どもの名前を呼ぶなど。
5. 質問：他児の行動、気持ち、考えなどに対する質問。
6. 同意：「禁止・拒否等」「指示・命令等」などの働きかけに対する同意。
7. 叙述（行動）：自分の行っている行動、あるいは行おうとしている行動についての叙述。
8. 叙述（気持ち）：現在あるいは過去の状況における自分の気持ち、考えについての叙述。
9. 叙述（他児）：他児の状態、行動、気持ち、考えについての叙述。
10. 叙述（外界）：自分、他児に関する叙述は除かれる。
11. 慣習的表現：「おはよう」「さようなら」「ごめん」などの表現。
12. 身体接触：相手の子どもに対する身体接触。手をつなぐなども含まれる。
13. 攻撃：たたく、けるなどの行動。
14. 物の移動：相手に物を与える、相手から物を受け取るなど。
15. 取る：相手の持っている物を取る、取ろうとする行動。
16. ごっこ・ルール：ごっこ遊びの中で用いられる決まり文句。ルール遊びの中のルールの確認などが含まれる。
17. その他：上記16カテゴリー以外の働きかけ、働きかけられ。子どもの言葉がはっきり記録されていない場合も含まれる。

(3) 信頼性：4月のデータを対象として、＜対人形式＞＜活動形式＞及び＜働きかけ内容＞の17カテゴリーについて、研究に参加している観察者2名が独立にVTRを視聴し評定を行い、2人の評定者間の信頼性〔(一致フレーム数) / (一致フレーム数+不一致フレーム数)〕を求めたところ、平均99.5%であった。なお、不一致のフレームについては、VTRを再度視聴すると共に筆記録などを参考に協議の上確定した。

Ⅲ. 結 果

1. フレーム数による分析

移行に伴う仲間関係の変化の年齢別特徴を明らかにするために、＜A. 対人形式＞～＜D. 働きかけられ＞の4カテゴリーについては、各サブカテゴリー毎に記録されたフレーム数について分析を行った。その際、本研究の主たる関心は移行直後の4月における変化であることから、Brunden (エベリット、1980) の方法を参考に、

各年齢別に4月を基準として3月、9月との違いを検討することにした。検定に当たっては5%水準を設定したことから、 $\alpha'=0.0125$ となっている。また、3月－4月間の変化と4月－9月間の変化は異なる要因によって引き起こされうると考えられるが、移行直後の4月の特徴を明らかにするために、TABLE 3には、3月－4月間、4月－9月間でいずれも統計的に有意であった項目のうち、4月を頂点とするいわゆる「山型」の変化を示した項目と4月を底辺とする「谷型」の変化を示した項目の平均フレーム数（いずれの項目も0－80の範囲）が示されている。以下では、年齢別にその特徴を述べることにする。

5歳児では、＜活動形式＞の「遊び・活動」と＜働きかけ＞の「保育者」が移行直後の4月に高くなる「山型」の変化を示していた。また、山型、谷型の変化ではないためTABLE 3には示されていないが、＜対人形式＞の「一人」は次第に減少していく傾向が認められた（3

TABLE 3 平均フレーム数の変化 () 内はSD

| 年齢 | カテゴリー | サブカテゴリー | 3月 | | 4月 | | 9月 | |
|-----|--------|---------|-------|---------|-------|---------|-------|---------|
| 5歳児 | 活動形式 | 遊び・活動 | 65.00 | (10.44) | 73.45 | (5.50) | 70.45 | (8.76) |
| | 働きかけ | 保育者 | 8.91 | (8.69) | 14.09 | (15.68) | 8.73 | (5.72) |
| 4歳児 | 対人形式 | 非役割 | 34.29 | (18.50) | 26.71 | (15.21) | 41.29 | (25.01) |
| | 活動形式 | 見 る | 7.86 | (9.37) | 1.57 | (1.40) | 4.14 | (3.48) |
| | | ブラブラ | 6.00 | (3.96) | 16.43 | (8.57) | 9.43 | (5.47) |
| | 働きかけ | 観察者 | 7.86 | (5.54) | 16.14 | (9.19) | 6.86 | (4.58) |
| | 働きかけられ | 観察者 | 5.57 | (4.17) | 9.71 | (6.92) | 6.14 | (4.42) |
| 3歳児 | 対人形式 | 一 人 | 32.00 | (10.33) | 47.40 | (22.14) | 26.20 | (13.44) |
| | 活動形式 | 遊び・活動 | 67.60 | (7.61) | 43.60 | (15.78) | 67.60 | (6.09) |
| | | ブラブラ | 9.00 | (7.80) | 32.40 | (15.83) | 5.60 | (4.84) |

月：32.18；4月：20.27；9月：16.09)。4歳児では、＜対人形式＞の「非役割」と＜活動形式＞の「見る」が4月に減少する「谷型」の変化を示し、＜活動形式＞の「ブラブラ」、＜働きかけ＞の「観察者」、＜働きかけられ＞の「観察者」が4月に増加する「山型」の変化を示していた。このうち、＜対人形式＞の「非役割」は、統計的に有意ではなかったが「一人」が4月に最も多くなっていた（3月：37.71；4月：42.43；9月：32.14）ことと関連して、4月に減少したと考えられる。また、4月に「ブラブラ」が多く、「見る」が少ないこと（統計的に有意ではないが「遊び・活動」も4月に最も少ない）、「観察者」に対する働きかけと働きかけられが多いことからすると、子ども集団での遊びが必ずしも十分展

開されていない様子もうかがわれる。3歳児では、4月には、＜対人形式＞において「一人」が最も多くなり、＜活動形式＞においては「遊び・活動」が最も少なく、「ブラブラ」が最も多くなっていた。また、「保育者」「観察者」とのかかわりには変化が認められなかった。これらのことから、大人との関係を強めることもなく、子ども同士の関係もあり活発ではなかった様子がうかがわれる。

しかし、フレーム数の分析では、子ども同士の関係を直接扱っているわけではない。そこで、以下では、子ども間のかかわりの年齢別変化の特徴を明らかにするために、相互作用の頻度と内容について分析をすることにした。

2. 子ども間の相互作用内容・対象の分析
 働きかけ内容別の相互作用（「働きかけ」＋「働きかけられ」）の頻度について、各時期の頻度の違いを χ^2 検定によって検定したところ、5歳児においては10項目、4歳児においては9項目、3歳児においては17項目すべてにおいて5%水準で統計的有意差が認められた（この際、「不特定」は3月：3.2%、4月：12.2%、9月：15.0%観察されたが、カメラの死角に入って子どもが特定できなかった場合も多く含まれていたことから、分析の対象とはしなかった）。しかし、この有意差は単に3つの時期の差を反映したものであり、必ずしも移行直後の4月の特徴を抽出したものではない。また、焦点児間の相互作用と焦点児—非焦点児間の相互作用によっても異なることが予想される。そこで、相互作用の相手を考慮して、移行によると考えられる変化を抽出する必要がある。その際、焦点児間の相互作用と焦点児—非焦点児間の相互作用の頻度を直接比較することはできない。これは本研究のデータ構造によるものである。すなわち、焦点児に関しては、双方向からデータが得られるのに対し、非焦点児については焦点児に焦点を当てている時のみデータが得られるという、いわば「非対称な関係データ」構造（千野・岡本、1996）となっているためである。また、焦点児の数は各時期23名と一定であるが、非焦点児の人数は3月には50名、移行後の4月、9月には79名となり、移行前後で異なっている。そこで、焦点児間の相互作用については各時期の頻度を、非焦点児との相互作用については4月、9月の頻度に50/79を掛けた数値を各々の時期の得点として3時期の平均を求めた。次に、4月の得点が3月、9月に比べて各々3期の平均の30%以上多くなっている、あるいは少なくなっている項目を抽出することにした。[なお、本研究では、データの構造が特殊であるため、焦点児と非焦点児を区別して分析する場合、統計的検定は行わず、任意に設定した30%水準を弁別点とした。30%水準を設定するに当たっては、本郷（2000）の研究で比較的安定した友だち関係が形成されていると考えられる子どもペア間の相互作用と

ペアの1人の子ともと他児との相互作用の頻度の差が22.3%～23.2%であったことを参考に、それよりも高い30%水準を基準とすることにした]。

その結果、移行直後の4月における得点が最も高くなる「山型」と最も低くなる「谷型」のパターンが焦点児間の相互作用と焦点児—非焦点児間の相互作用の各々について描けることになり、その組み合わせは論理的には4パターンとなる。しかし、このうち実際に観察されたのは2パターンであった。TABLE 4には、年

TABLE 4 相互作用頻度の変化

| | | 山(焦点児) | — 谷(非焦点児) | | |
|-----|--------|--------|-----------|-----|-----|
| | | | 3月 | 4月 | 9月 |
| 5歳児 | 禁止・拒否 | 焦点児 | 37 | 84 | 64 |
| | | 非焦点児 | 123 | 32 | 131 |
| | 指示・命令 | 焦点児 | 36 | 126 | 43 |
| | | 非焦点児 | 120 | 43 | 134 |
| | 遊びの提案 | 焦点児 | 21 | 51 | 25 |
| | | 非焦点児 | 53 | 32 | 71 |
| | 呼びかけ | 焦点児 | 17 | 89 | 32 |
| | | 非焦点児 | 40 | 30 | 68 |
| | 質問 | 焦点児 | 28 | 117 | 42 |
| | | 非焦点児 | 77 | 42 | 71 |
| | 叙述・行動 | 焦点児 | 18 | 86 | 34 |
| | | 非焦点児 | 56 | 22 | 43 |
| | 叙述・気持ち | 焦点児 | 6 | 43 | 12 |
| | | 非焦点児 | 31 | 11 | 25 |
| | 叙述・外界 | 焦点児 | 27 | 131 | 53 |
| | | 非焦点児 | 91 | 24 | 63 |
| | 攻撃 | 焦点児 | 4 | 13 | 2 |
| | | 非焦点児 | 21 | 2 | 11 |
| | 物の移動 | 焦点児 | 8 | 33 | 10 |
| | | 非焦点児 | 25 | 7 | 88 |
| | その他 | 焦点児 | 44 | 153 | 92 |
| | | 非焦点児 | 120 | 49 | 179 |
| 4歳児 | 禁止・拒否 | 焦点児 | 37 | 77 | 39 |
| | | 非焦点児 | 47 | 18 | 34 |
| | 叙述・行動 | 焦点児 | 12 | 63 | 44 |
| | | 非焦点児 | 25 | 13 | 26 |
| | 叙述・気持ち | 焦点児 | 5 | 24 | 15 |
| | | 非焦点児 | 10 | 0 | 10 |
| | 身体接触 | 焦点児 | 24 | 46 | 24 |
| | | 非焦点児 | 33 | 9 | 37 |
| | | 谷(焦点児) | — 谷(非焦点児) | | |
| | | | 3月 | 4月 | 9月 |
| 3歳児 | 禁止・拒否 | 焦点児 | 32 | 7 | 14 |
| | | 非焦点児 | 26 | 16 | 67 |
| | 指示・命令 | 焦点児 | 14 | 6 | 20 |
| | | 非焦点児 | 17 | 13 | 57 |
| | 叙述・外界 | 焦点児 | 15 | 1 | 14 |
| | | 非焦点児 | 9 | 1 | 36 |
| | その他 | 焦点児 | 28 | 9 | 21 |
| | | 非焦点児 | 46 | 7 | 74 |

年齢別に各パターンに分類される働きかけ内容と頻度が示されている。ここから、5歳児では、移行直後に焦点児間で相互作用が増加し、焦点児—非焦点児間で減少している項目は11項目であるのに対して、4歳児では4項目、3歳児では0項目となっている。また、焦点児間、焦点児—非焦点児間の相互作用が共に減少している項目は、5歳児、4歳児0項目、3歳児4項目となっている。このことから、3歳児においては移行直後に子ども間の相互作用が全体に少なくなっているのに対して、5歳児ではむしろ一緒に移行した子どもとの相互作用を中心に活発になっている様子がうかがわれる。

また、焦点児間で増加し、焦点児—非焦点児間で減少している項目の内容についてみると4歳児の4項目中3項目（「身体接触」を除く）は5歳児でも該当している。さらに、3歳児で共に減少していた4項目は、5歳児では焦点児間の相互作用で増加していた。

3. 仲良しタイプによる分析

子どもの「仲良し」関係を特定するために、まず個人毎に移行前3月における相互作用数（働きかけ数＋働きかけられ数）を求めた。その結果、相互作用数は平均149.57（SD=53.77；範囲：50–262）であった。次に、相互作用が一定数以上ある子どもを確定するため、相互作用数が80（1フレーム当たり1相互作用）以上の焦点児を抽出したところ5歳男児1名、4歳女児1名を除く21名が該当した。これらの子どもについて、Hinde et al. (1985)を参考に、特定の他児との相互作用数が全体の30%以上で、なおかつ特定の他児に対する働きかけ数、特定の他児からの働きかけられ数とともに10以上の場合、その他児を「仲良し」として特定した（なお、「仲良し」の間でも「禁止・拒否」「攻撃」などのいわゆる「否定的相互作用」が起こりうると考え、それらの相互

作用頻度も計算に含めたが、否定的相互作用が全相互作用の50%を超えるような場合は含まれていない）。その結果に従い、タイプⅠ：焦点児内に仲良しがいる子ども8名（3歳児4名、4歳児2名、5歳児2名）、タイプⅡ：非焦点児に仲良しがいる子ども7名（4歳児1名、5歳児6名）、タイプⅢ：どちらにも仲良しがいない子ども8名（3歳児1名、4歳児4名、5歳児3名）の3つに分類した。なお、焦点児と非焦点児のどちらにも仲良しがいる子どもが3歳児女児に1名いたが、この場合焦点児内に仲良しがいるという点でタイプⅠに分類した。また、相互作用数が80未満で、「仲良し」を特定できないとされた子ども2名はタイプⅢに分類された。

次に、子ども間の相互作用内容・対象の分析と同様に各タイプ別に、移行直後の4月における得点が最も高くなる「山型」と最も低くなる「谷型」のパターンを焦点児間の相互作用と焦点児—非焦点児間の相互作用の各々について描き、その組み合わせの4パターンを作成した。TABLE 5には実際に得られた3つのパターンについて各パターン当てはまる項目数（働きかけ内容のカテゴリー数。最大17。）が示されている。ここから、年齢別に各タイプの項目数をみると、5歳児では、焦点児間での相互作用が増加し焦点児—非焦点児間の相互作用が減少するいわゆる「山・谷パターン」がタイプⅠ、タイプⅡで多くなっていた。一方、4歳児ではタイプⅡ、タイプⅢで「山・谷」パターンが多くなっていた。5歳児と4歳児で共通しているのは、仲良しが他の保育所に移行してしまったタイプⅡの子どもが、むしろ顔見知りであった焦点児間の関係を強めているということである。しかし、タイプⅠとタイプⅢのパターンは、5歳児と4歳児で異なっており、5歳児では仲良しがいなかったタイプⅢの子どもは焦点児間の関係をあまり強める傾向はないのに対して、4歳児ではタイプⅢの子どもは焦

TABLE 5 仲間タイプ別の変化カテゴリー数

| 年齢・タイプ | | 変化パターン | | | |
|--------|----------|----------|-----|-----|-----|
| | | 焦点児・非焦点児 | | | |
| | | 山・谷 | 谷・谷 | 山・山 | 谷・山 |
| 5歳児 | タイプⅠ(2人) | 8 | 0 | 1 | 0 |
| | タイプⅡ(6人) | 7 | 0 | 0 | 0 |
| | タイプⅢ(3人) | 3 | 2 | 0 | 0 |
| 4歳児 | タイプⅠ(2人) | 2 | 1 | 0 | 0 |
| | タイプⅡ(1人) | 8 | 0 | 0 | 0 |
| | タイプⅢ(4人) | 6 | 1 | 0 | 0 |
| 3歳児 | タイプⅠ(4人) | 0 | 5 | 0 | 0 |
| | タイプⅢ(1人) | 0 | 1 | 0 | 0 |

点児間の関係を強める傾向が認められた。また、3歳児についてはどちらのタイプでも焦点児間の関係を強める傾向は認められなかった。5歳児と4歳児のパターンⅢの違いは仲良しのいないことが両年齢で異なる意味を持つ可能性を示すものとも考えられる。しかし、焦点児内に仲良しが存在し共に移行したタイプⅠの両年齢における違いは説明できない。この点を明らかにするために、次には焦点児間の仲間関係の変化を調べてみることにする。

4. 焦点児間の仲間関係の変化

年齢によって同じタイプでも変化のパターンが違っていた原因を探るために2つの補足的分析を行った。第1に、3月と同様に4月、9月についても仲良しタイプを分類し、その変化について分析した。TABLE 6から、移行直後の4月にはどの年齢においても非焦点児に仲良しがいる子どもはいなかったが、9月には5名（5歳児2名、4歳児1名、3歳児2名）が新しい保育所の子どもと仲良し関係を形成していた（タイプⅡ）ことが分かる。年齢別の変化の特徴をみると、5歳児では3月にタイプⅠであった子ども2名は4月にもタイプⅠであったのに加え、3月にタイプⅡであった子ども6名中4名、タイプⅢであった子ども3名中1名がタイプⅠに移行し、4月にはタイプⅠが7名となっていた。一方、4歳児で4月にタイプⅠに分類されたのは3名であった。このことから、5歳児ではタイプにかかわらず4月に焦点児間の関係が強まっており、これが3月におけるタイプの差による移行の影響を少なくしていたと考えられる。

TABLE 6 仲良しタイプの変化(全年齢)

| 3月 | 4月 | 9月 |
|--------|--------|--------|
| タイプ(人) | タイプ(人) | タイプ(人) |
| Ⅰ(8) | Ⅰ(4) | Ⅰ(3) |
| | Ⅲ(4) | Ⅲ(1) |
| | | Ⅰ(2) |
| | | Ⅱ(2) |
| Ⅱ(7) | Ⅰ(5) | Ⅰ(2) |
| | | Ⅱ(2) |
| | | Ⅲ(1) |
| | Ⅲ(2) | Ⅰ(1) |
| | | Ⅲ(1) |
| Ⅲ(8) | Ⅰ(2) | Ⅰ(2) |
| | Ⅲ(6) | Ⅰ(1) |
| | | Ⅱ(1) |
| | | Ⅲ(4) |

第2に、個々の子ども間の変化を探るために分析を行った。まず、初めに5歳児11名(A~J)とA保育所において一緒にクラスで生活していた4歳児1名(L)の計12名を対象として分析した(L児については、年齢別の分析では4歳児に含められていたが、子ども間の変化の分析ではここに含めて分析することにした)。その際、最初に12人の焦点児について、各時期において誰が誰に対してどのくらい働きかけたかを表すマトリックスを作成した。その結果、対象児12名間の相互作用は3月：356例、4月：1,331例、9月：599例であり、4月にかかわりが増加していた($\chi^2=676.07$, $df=2$, $p<.001$)。すなわち、5歳児では4月には、保育所間の移行によって、以前から顔見知りであった子ども同士の相互作用が一時的に増加したと考えられる。一方、L児を除く4歳児6名(M~R)の間では、3月：223例、4月：268例、9月：394例($\chi^2=53.27$, $df=2$, $p<.001$)であり、3歳児5名(S~W)の間では3月：235例、4月：58例、9月：80例($\chi^2=149.70$, $df=2$, $p<.001$)であり、移行直後の4月に同年齢の移行児間での関係を強めている様子はうかがわれなかった。

次に、伊藤(1984)、小山(1996)を参考にしてマトリックスの各セルについて期待値(構造的ゼロを持つ場合の期待値)を算出し、観察頻度と期待値の間の χ^2 検定を行った。FIGURE 1は、5%水準で観察頻度が期待値に比べて有意に多く、なおかつ期待値が5以上のセルを抽出し、その関係を図示したものである。FIGURE 1にみられるように、5歳児においては、移行直前の3月では、E児(男児)とI児(女児)との間に相互の関係がある他はそれほど目立った特徴はない。一方、移行直後の4月には、A児、C児、D児という3人の女児とB児、F児、I児という3人の女児のサブグループがあり、D児とB児が各グループのつなぎ役になっていることがうかがわれる。また、E児、H児、L児という男児3人からなるサブグループが存在する。9月になると男児3人のサブグループは存続し、そのうちの1人であるH児とこれまで女児のサブグループに加わっていなかったJ児との相互関係が見られるようになる。しかし、4月に見られた女児のサブグループはなくなり、女児は移行先の子どもを含め、より多くの子どもとかかわるようになった様子がうかがわれる。4歳児では、3月に見られたNとRという女児の関係が、4月にはOとのかかわりを通して維持される形に変化していた。9月には再びNとRとの直接的相互作用が増加すると共に、MのRに対する働きかけが見られるようになった。3歳児では、移行前3月には5人が3人と2人のサブグルー

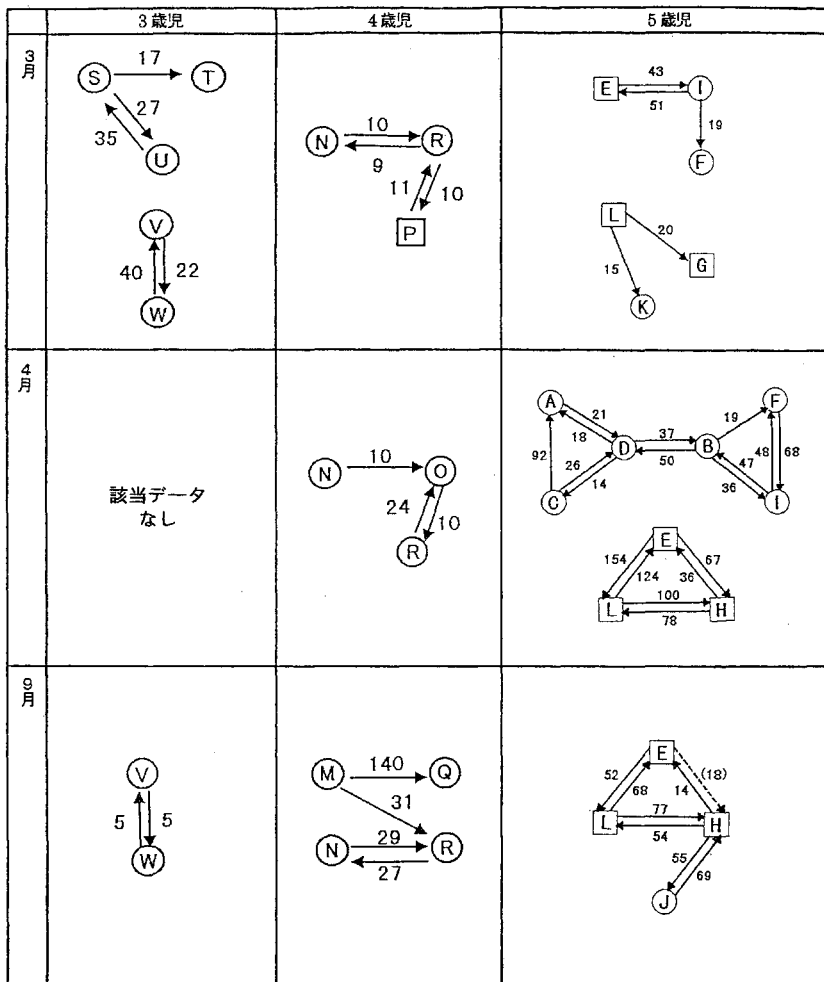


FIGURE 1 焦点児間の関係の変化

[注：○は女児、□は男児、矢印は働きかけの方向、数字は働きかけの頻度を表す。]

ブに分かれるような関係が見られた。しかし、移行直後の4月には焦点児間の関係が見られなくなり、9月には3月に認められたVとWという2人の関係が再び出現していた。

IV. 考 察

本研究は、保育所の建て替えのために、別の保育所に集団で移行した幼児23名を対象に、移行による仲間関係の変化を2つの予想を中心に検討したものである。以下、先の結果に基づいて考察する。

1. 子どもの遊びの状態や大人との関係を捉えたフレーム数の分析から、5歳児では移行直後の4月に「遊び・活動」が増加し、むしろ活発に遊んでいる様子がうかがわれた。一方、4歳児では「プラプラ」が多くなる

と共に「観察者」とのかかわりも増加していたことから、子ども間の遊びがあまり活発でなくなったと推測された。さらに、3歳児では、特定の「遊び・活動」が減少し、「一人」「プラプラ」が増加したことから、最も保育所間の移行による影響が強く現れていたのではないかと考えられる。

このことは、子ども間の相互作用の分析や焦点児間の仲間関係の変化の分析からも確認される。すなわち、5歳児では、移行直後の4月に一緒に移行した焦点児との相互作用が増加することから、一時的に既知の子ども同士の間を強く、その関係を通して新しい環境に適応しようとしていたと考えられる。一方、3歳児は、非焦点児との相互作用が少ないだけでなく、焦点児間の相互作用も減少する傾向がみられ、子ども間の相互作用自体が

生起しにくい状態にあったと考えられる。これらの結果は、Feldbaum, Christenson, & O'Neal (1980) の研究結果と一致する。彼らの研究では、3歳児が既成の集団に参入する過程が検討されている。しかし、彼らの研究の対象児は集団で移行したわけではないということからすれば、本研究の3歳児にとって既存の仲間関係は「安全基地」「社会的アンカー・ポイント」として機能しにくかったと考えられる。また、4歳児では、5歳児と3歳児の中間に当たるような変化を見せていた。たとえば、相互作用の分析では、焦点児間の相互作用を増加させる項目も見られたが、同時に焦点児間でも非焦点児との間でも共に相互作用が減少している項目もみられたことなどが対応する。しかし、4歳児において焦点児間でも非焦点児間でも共に「谷型」の変化をみせた項目は「攻撃」「取る」という「否定的相互作用」にかかわる2項目であった。これらの項目は、アッシャー・クイー (1996) が、他児から拒否されたり無視されたりする危険性を少なくする効果的な仲間入りのシークエンスの1つの例としてあげている事柄と対応する。すなわち、最初是他児から拒否を多く受けそうな行動を少なくすることによって、集団への適応を図ろうとする行動とも解釈できる。以上の結果は予想1に沿うものだと考えられる。

2. 仲良しタイプの分析から、予想2で示したような移行前の仲良し関係のタイプによる違いは明かではなかった。その原因として第1に、幼児期における仲良し関係の不安定さがあげられるかもしれない。しかし、移行前の3月と移行後の4月の観察期間は1か月も離れていないことから、この不安定さだけでは説明できない。第2に、この結果はLadd (1990) の研究と一致するかもしれない。すなわち、以前からの友だちの存在は、子どもが新しい環境をどう認知するかという点に影響を与えるが、そこでどう振る舞うかという点については大きな影響を与えないということである。このような可能性もあるとは言え、先にも述べたように、本研究の焦点児に関しては、新しい環境において既知の子どもとの間でより親密な関係を作り上げることによって適応しようとしたことが、仲良しタイプによる差を生み出さなかった最も大きな原因であると考えられる。さらには、新たな対人関係を作り上げる子どもの対人的スキルや能力が仲良しタイプによる差を生み出さなかった可能性もある。すなわち、移行前に仲良しがいた子ども(タイプI、II)については、その仲良しが焦点児か非焦点児かにかかわらず、4月において既知の集団の中で新たな関係を形成することが多かった。

また、4月時点で同時に移行した焦点児間のかかわり

よりも移行先の子ども(非焦点児)とのかかわりの方がむしろ多い子どもが5歳児2名(男児1名、女児1名)、4歳児1名(女児)がみられた(これらの子どもが非焦点児と以前から顔見知りであったということはない)ことも仲良しタイプ間の差を生み出さなかったことに関連していると考えられる。このうち5歳児2名については、移行前の保育所における他児とのかかわりにおいて他児から「禁止・拒否」(各々男児G:20.5%、女児J:17.4%;5歳児平均12.5%)をされることが多く、必ずしも仲間関係がうまく行っておらず、移行によって新たな仲間関係を形成しようとしたとも考えられる。男児Gは9月時点で移行先の子どもとの間で仲良し関係を形成していた。また女児Jは焦点児の男児との間で関係を形成していた。

3. 上述の結果は、移行直後に子ども間の相互作用が少なくなるという点で3歳児に最も移行の影響が現れるだろうと考えた予測1の結果に沿うものであった。これは、一つには「適切な状況の認知」「適切な社会的行動の実行」「自己モニタリング」(Ladd & Mize, 1983)といったスキルの獲得が十分ではないため、新しい仲間関係を形成することや既存の仲間関係を柔軟に変化させることなどに困難があったと考えられる。しかし、これと関連して、保育所間の移行それ自体ではなく、保育環境の変化が3歳児の仲間関係に影響を与えたということも考えられる。すなわち、ここでの3歳児は移行前には2歳児クラスに属しており、比較的少人数のクラスの中で過ごしていた。移行後は、3歳児クラスになったため、クラス活動では集団の規模も大きくなり、保育者も担任1名となったことも影響している可能性がある。この点を明らかにするためには、今後同一保育所内での2歳児クラスから3歳児クラスへの移行のデータ収集し、比較することが必要だと考えられる。

また、情緒的側面の変化に着目するために事後的に分析を試みた「笑い」(各年齢において「泣き」はほとんど観察されなかった)が生起したフレーム数については、5歳児においてのみ4月に増加する傾向が確認された(平均フレーム数 3月:11.63;4月:27.09;9月:14.82; $\chi^2=7.46$, $df=2$, $p<0.05$)。その点で、先の結果と合わせ、5歳児は、新しい保育所の中でうまく適応していたように見える。しかし、そのような解釈は必ずしも妥当ではないかもしれない。たとえば、「笑い」の中には相互作用を楽しんでいるというよりは、妙に気分が高揚している、他児からの攻撃を避けるために笑うなども含まれていた。これは、必ずしも情緒的には安定していないことの現れである可能性もある。ちなみに、年

長のある女兒は、移行後しばらくしてから、保育者に対して「最初はこの保育所に来るのが恐かった」という気持ちを述べた。この子どもの4月時の特徴をみると、移行先の子どもに対しては働きかけが若干観察されたが、移行先の子どもから働きかけられることは全くなかった。したがって、むしろ移行による緊張感から、焦点児を中心とした相互作用が多くなっているという点も考慮する必要があると考えられる。その点で、今後は情緒の側面の変化を含めた分析をする必要があるだろう。

以上のことから、保育所間の移行の影響はとりあえず量的には3歳児において最も大きく現れたと考えられるが、5歳児に対しても対人関係の質的な側面での影響を及ぼしていたと考えられる。したがって、移行に際して保育者は子どもに直接働きかけて、新しく入所した子どもと従来からその集団に所属していた子ども間の相互作用を促進するだけではなく、既存の子ども関係を一時的に維持することや子どもの持つ不安感を軽減するような働きかけを行うことが重要となってくると考えられる。また、保育所間の移行は必ずしも「否定的な」影響を及ぼすだけでなく、元の集団において仲間関係がうまくいっていなかった子どもにとっては、新たな仲間関係を形成するきっかけとなりうると考えられる。このようにして新たに形成された仲間関係を維持・発展させるような視点も保育者にとって必要となってくると考えられる。

文 献

- アッシャー、S.R.・クイー、J.D. 編著 1996 山崎晃・中澤潤 監訳 子どもと仲間の心理学 — 友だちを拒否するところ — 北大路書房
(Asher, S.R., & Coie, J.D. 1990 Peer rejection in childhood. Cambridge University Press)
- 千野直仁・岡本杉訓 1996 非対称多次元尺度構成法とその周辺. 行動計量学、23、130-152.
- Erwin, P. 1993 Friendship and Peer Relations in Children. Wiley.
- エヴェリット、B. S. (山内光哉監訳 弓野憲一・菱谷晋介 訳) 1980 質的データの解析 — カイ二乗検定とその展開 — 新曜社
- Feldbaum, C.L., Christenson, T.E., & O'Neal, E.C. 1980 An observational study of the assimilation of the newcomer to preschool. Child Development, 51, 497-507.
- Hinde, R.A., Titmus, G., Easton, D., & Tamplin, A. 1985 Incidence of "Friendship" and Behavior toward Strong Associates versus Non-associates in Preschoolers. Child Development, 56, 234-245.
- 本郷一夫 1994 仲間関係. 日本児童研究所編「児童心理学の進歩 1994年版」、227-253、金子書房.
- 本郷一夫 1997「友だち」の形成過程に関する研究(2) — 保育所の3歳児クラスにおける子ども同士の関係 —. 日本発達心理学会第8回大会発表論文集、162.
- 本郷一夫 2000 幼児期における「友だち関係」の成立と崩壊過程に関する研究. 平成10~11年度科学研究費補助金・基盤研究(C)研究成果報告書.
- 本郷一夫・布施佐代子・鈴木牧夫 1987 保育所における乳児の相互作用に関する縦断的研究 — 行動カテゴリーと相互作用系列からの分析 —. 東北教育心理学研究、2、1-9.
- 本郷一夫・佐々木保行・佐々木宏子・橋川喜美代・高梨一彦 1994 幼稚園における3年保育の現代的意義と課題(3) — 子どもの遊びと仲間関係について —. 鳴門教育大学学校教育研究センター紀要、8、65-72.
- 伊藤嘉昭 監修 粕谷英一・藤田和幸 著 1984 動物行動学のための統計学. 東海大学出版会.
- 小山高正 1996 遊び行動への生物学的アプローチ. 高橋たまき・中沢和子・森上史朗 共編「遊びの発達学 基礎編」第3章、61-81、培風館.
- 倉持清美 1994 就学前児の遊び集団への仲間入り過程. 発達心理学研究、5、137-144.
- 倉持清美・無藤隆 1992 遊び集団の一員になっていく過程. 日本発達心理学会第3回大会発表論文集、70.
- Ladd, G.W. 1990 Having Friends, Keeping Friends, Making Friends, and Being Liked by Peers in the Classroom: Predictors of Children's Early School Adjustment? Child Development, 61, 1081-1100.
- Ladd, G.W., & Mize, J. 1983 A Cognitive Social Learning Model of Social Skill Training. Psychological Review, 90, 127-157.
- Ladd, G.W., & Price, J.M. 1987 Predicting children's social and school adjustment following the transition from preschool to kindergarten. Child Development, 58, 1168-1189.
- 中澤 潤 1992 新入幼稚園児の友人形成 — 初期相互作用行動、社会認知能力と人気 — 保育学研究、98-106.
- 大野和男 1997 転入児を中心にみた仲間関係. 日本発達心理学会第8回大会発表論文集、159.

- 大野和男 1998 転入児における仲間関係の形成過程。
日本発達心理学会第9回大会発表論文集, 55.
- Roopnarine, J.L. 1985 Changes in peer-directed behavior following preschool experience. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 740-745.
- 佐藤公治・請川滋大・結城孝治・宮下明子・若井邦夫
1998 幼児の集団参加と相互作用 展開への生態学的接近(3) 一年少児男子集団の仲間関係の形成過程一。日本発達心理学会第9回大会発表論文集、58.
- Schwarz, J.C. 1972 Effects of peer familiarity on the behavior of preschoolers in a novel situation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 24, 276-284.
- 田上不二夫 1989 幼児が遊びに加わる時に必要とされる社会的技能について。日本心理学会第53回発表論文集、102.
- 高濱裕子・無藤隆 1997 移行期の仲間関係 一新入園児の参入にともなう進級児の相互作用の変化一。日本家政学会誌、48、4、279-287.
- 田村和子・森永良子・前典子 1999 入園児の不応行動の経過観察。日本発達心理学会第10回大会発表論文集、522.
- 山本多喜司・ワップナー、S. 1992 人生移行の発達心理学。北大路書房

Changes of Peer Relations Following the Transition from One Nursery School to Another

Kazuo Hongo*, Tomoko Suzuki**, Yuko Matumura***, Hiroki Inagaki****,
Yoshiko Koizumi** and Yuko Ibara*****

* (Graduate School of Education Tohoku University), ** (Kotorisawa Gakuen)

*** (Tokyo Metropolitan Institute of Gerontology), **** (Mental Clinic Dada)

The present study was to explore the effects of the transition from one nursery school to another on peer relations. Subjects were twenty-three children who were transitioned for the reconstruction of a nursery school. They were observed in March (before the transition), April (after the transition), and September (five months after the transition) 1997.

The main results were as follows: (a) Three-years-old children were most influenced by the transition. The frame numbers of "Play and Activity" decreased and that of "Off-Task Behavior" increased. (b) The frequency of "Laugh" in five-years-old increased. (c) "The types of friendship relations" before the transition were not clearly related to the peer relations after the transition. (d) The old structure of peer relations were changed by the transition.

Key words: peer relation, nursery school, transition, friendship relation